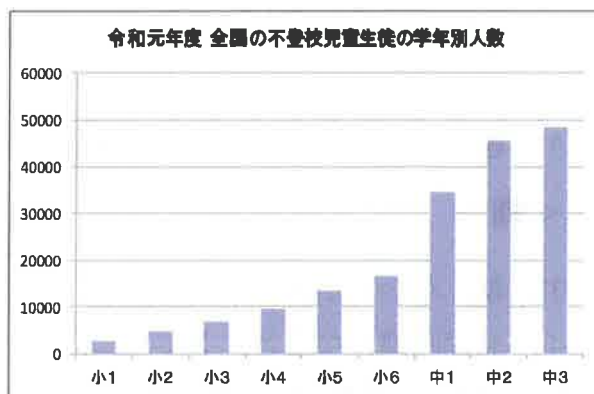
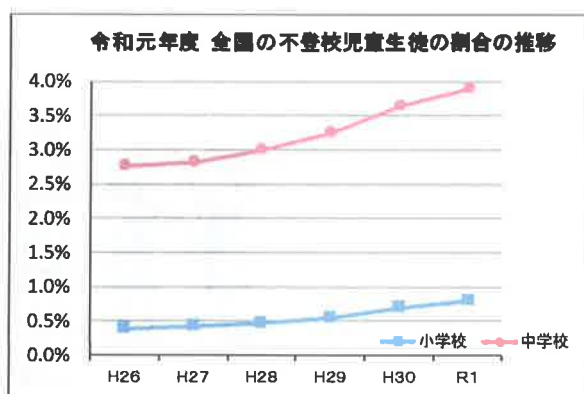


不登校の予防に向けて

家庭と学校が確かな絆を結び、子どもの健やかな成長を

不登校とは、「友達とのトラブル」「勉強がわからない」「やる気が起きない」など、子どもが登校しない、あるいはしたくてもできない状況で、欠席が年間30日以上のことをさします。令和元年度の全国の不登校児童生徒の割合は小学校0.8%、中学校3.9%となり、いずれも過去最高となっています。



特に、中学1年生では学習や生活の変化になじめなかったり、中学2年生から3年生にかけては思春期の不安定な時期と重なったりすることで、不登校となる生徒が増加します。また、近年、小学校でも不登校児童数は増加傾向にあり、問題の低年齢化が見られます。

家庭と学校との十分な連携

不登校を予防するためには、学校と家庭が日頃から子どもの様子を伝え合う必要があります。学校では現在、不登校にならないように、小・中学校の連携強化、教育相談体制の充実、そして子どもの休みはじめの段階での早期の対応に努めています。しかし、学校だけで全ての子どもの不登校につながる悩みを、早期に発見することは難しいのが現状です。そこで、家庭においても、子どもの悩みの早期発見に向け、日頃から学校との十分な連携をお願いします。



例えば「表情が暗く、不安げな様子が見られる」「朝、なかなか起きなくなる」など、裏面に記載している様子が見られたら、**ご連絡なく、学校に連絡をお願いします。**学校は家庭と一緒に、子どもの悩みの「背景や原因」の把握に努め、お子様にとって一番良い方法を考えていきます。